特集３
2006年度 プロジェクトA4
国際日本文化研究理論研究会

解題

（「国際日本文化研究」理論研究会第五回「映画言語と中国近代」報告）

北野圭介

ニューヨーク大学東アジア研究科の張旭東教授をゲスト・スピーカーとして迎え，また東京大学大学院総合文化研究科の中島隆博准教授とゲスト・コメンテーターとして，2008年12月８日に，「映画言語と中国近代」と題された第五回研究会が開かれた。次頁より掲載されるのは，研究会の討議のたたき台となる張教授の論考（以下に邦訳を掲載）であるが，以下，ごく簡単に研究会の報告を記しておきたい。

研究会は，この論考に加え，張教授による基調講演がなされることがはじまった。1970年代から80年代にかけて，つまり，いわゆる文化大革命以後の状況にあって，映画が言語に類した表現手段としてあらためて捉え返され，その媒体の可能性を再検証するなか，どのような議論や実践があったのかが説明された。依拠される思想のレヴェルで，あるいは追及される美学のレヴェルで，あるいは活用される技術のレヴェルで，さらには，思想やイデオロギーのレヴェルで，いかなる考察と刷新があったのかが，理論的に見通しのよいかたちで解説された。

そうした理論的な解説の上で，『盗馬賊』（田壮壮，1984）と『子供たちの王様』（陳凱歌，1987）について，具体的な映画言語の分析がなされ，さらには，1990年代以降，こうした70年代，80年代の試みがどのように継承（消滅）していったのかについての説明があった。

のち，中島准教授による歴史的な「反復」というものがそこにあったのではないかというコメントや，出席者からの「近代」概念についての質疑などが出され，さまざまな討議が続き，活発な議論がなされ，会は終了した。